

1.はじめに

おはようございます。

前回、イエス・キリストの十字架について考えるというテーマで、4つのポイントからお話をさせていただきました。

1)あなたにとってイエスは誰か? : 皆様のご家族や友人にとってイエスは誰か、また歴史や宗教の授業で、あるいは教会でのメッセージでイエスがどのように教えられたか、ということではなく、あなたにとってイエスは誰か、という答えをもっているかどうか。

2)イエスはなぜご自分の最期を弟子たちに話されたのか? : 神は私たちのことをよく理解されている。意図なく、意味なく起こることは何一つない。あらかじめ、神は弟子たちにイエスの十字架による死を教えることによって、弟子たちが十字架の意味、目的について受け止めることができるよう、弟子たちの内面を少しずつ整えられた。

詩編 103:14

103:14 主は、私たちの成り立ちを知り、私たちがちりにすぎないことを心に留めておられる。

3)仕えるために来られた : 神は、ご自身が仕えたいとき、都合の良いときだけ私たちに仕えられる方ではなく、いつも、どのような状況であっても休むことなく仕えてくださる方であり、目には見えないけれども、この世にあって目に見えるどのような存在よりもはるかに信頼に値する方。

4)イエスは私たちの罪のために死なれた : イエスは、私たちの罪のために十字架につけられた

イザヤ書 53:6

53:6 私たちはみな、羊のようにさまよい、おのれの、自分かってな道に向かって行った。しかし、【主】は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。

このようなポイントについてお話しさせていただきました。いかがでしょうか。今、皆さんにとってイエスは誰でしょうか。どのような存在でしょうか。イエスとの関係をはっきりさせない限り、聖書からどのような話を聞かれても、あるいはその話からどのような感動を受けられても、聖書が本当に皆さんに伝えたいことには届かないのです。イエスは誰か、という質問の答えを先送りせず、今日、皆さんにとってイエスとは誰か、という答えを見つけていただきたいと思います。

2.十字架を身近に感じることができるか?

マタイの福音書 20:17-24 をお読みしたいと思います。

20:17 さて、イエスは、エルサレムに上ろうとしておられたが、十二弟子だけを呼んで、道々彼らに話された。20:18 「さあ、これから、わたしたちはエルサレムに向かって行きます。人の子は、祭司長、律法学者たちに引き渡されるのです。彼らは人の子を死刑に定めます。

20:19 そして、あざけり、むち打ち、十字架につけるため、異邦人に引き渡します。しかし、人の子は三日目によみがえります。」

20:20 そのとき、ゼバダイの子たちの母が、子どもたちといっしょにイエスのもとに来て、ひれ伏して、お願いがありますと言った。

20:21 イエスが彼女に、「どんな願いですか」と言われると、彼女は言った。「私のこのふたりの息子が、あなたの御国で、ひとりはおあなたの右に、ひとは左にすわれるようにおことばを下さい。」

20:22 けれども、イエスは答えて言われた。「あなたがたは自分が何を求めているのか、わかっているのです。わたしが飲もうとしている杯を飲むことができますか。」彼らは「できます」と言った。

20:23 イエスは言われた。「あなたがたはわたしの杯を飲みはします。しかし、わたしの右と左にすわることは、このわたしの許すことではなく、わたしの父によってそれに備えられた人々があるのです。」

20:24 このことを聞いたほかの十人は、このふたりの兄弟のことで腹を立てた。

前半では、イエスが12弟子だけを呼んで、ご自身が迎える最期について、そしてよみがえりについて話されます。その後、ゼバダイの子たちの母、ヤコブとヨハネの母が、その2人の子といっしょにイエスのもとに来て、ひれ伏して、イエスの御国で、イエスの左右にすわれるよう、ことばがほしいと願います。マルコの福音書 10:35-41 では、ヤコブとヨハネがお願いしたように教えられています。

あらためて、繋がったこれら2つの記事を考えるなら、弟子たちは、特にヤコブとヨハネは、到底イエスが十字架につけられることを理解していた、受け止めていたとは思えません。受け止めていたなら、そんなことを言っている場合ではなかったと思います。ほかの十人は、ヤコブとヨハネのことで腹を立てた、と教えられています。これも非常識なことをお願いすることについて腹を立てたということではなく、抜け駆けしてお願いしたことに対して腹を立てたということでしょう。マルコの福音書 9:34 やルカの福音書 9:46 では、弟子たちの間に、だれが一番偉いか、という議論をしていたことが教えられています。12人の中で誰が一番偉いのか、ということに興味があったのでしょうか。

イエスは、繰り返しご自身が十字架につけられることをお話しになりました。初めにイエスがこの話をされたときに、ペテロがイエスをいさめて、その結果イエスから「下がれ、サタン！」と言われてしまいますが、その後、イエスから十字架について教えられても、弟子たちの反応はどうもずれている感じがします。

それは、私たちも同じかもしれません。私たちが、教会で、礼拝で聞くメッセージの中心には、いつも十字架があるはず。話の中に十字架が直接引用されなくても、イエス・キリストの十字架がなければ、私たちがこのように毎週日曜日に集まり、神を礼拝し、賛美することにも意味がありません。なぜなら、イエス・キリストの十字架がすべての問題を解決したからです。では、私たちはこの十字架にどこまで関心を持っているのでしょうか？また、この十字架をどこまで身近に感じているのでしょうか？

私たちは、普段の生活の中で興味を持つこと、身近に感じることはたくさんあると思いますが、それがたとえ自分自身のことや家族のこと、あるいは皆さんが最も大切に思っていることよりも、いつも十字架のことを覚え、十字架を身近に感じる事ができれば幸いです。

パウロは、ガラテヤ人への手紙 6:17 でこのように教えています。

ガラ 6:17 これからは、だれも私を煩わさないようにしてください。私は、この身に、イエスの焼き印を帯び

ているのですから。

パウロがそうであったように、私たちもイエスの焼き印を帯びているほどに、十字架のことを身近に感じ、いつも覚えることができるようになれば、イエスのこと、十字架のことをもっと深く、知識と体験の両方を通して理解することができると思います。

3. 十字架上の7つのことば

イエスは十字架上で7回話されます。

1) ルカ 23:34 そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」 彼らは、くじを引いて、イエスの着物を分けた。

2) ルカ 23:43 イエスは、彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」

3) ヨハネ 19:26 イエスは、母と、そばに立っている愛する弟子とを見て、母に「女の方。そこに、あなたの息子がいます」と言われた。

ヨハネ 19:27 それからその弟子に「そこに、あなたの母がいます」と言われた。その時から、この弟子は彼女を自分の家に引き取った。

4) マタイ 27:46 三時ごろ、イエスは大声で、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と叫ばれた。これは、「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。

5) ヨハネ 19:28 この後、イエスは、すべてのことが完了したのを知って、聖書が成就するために、「わたしは渇く」と言われた。

6) ヨハネ 19:30 イエスは、酸いぶどう酒を受けられると、「完了した」と言われた。そして、頭をたれて、霊をお渡しになった。

7) ヨハネ 23:46 イエスは大声で叫んで、言われた。「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」こう言って、息を引き取られた。

今日は、この7つのことばの内、1)と2)についてお話ししたいと思います。初めの3つは、人との関わりにおいて話されたことばであり、後半の4つは神との関りにおいて話されたことばです。

4. 「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」 (ルカ 23:34)

ユダヤ人たちは、イエスを十字架につけました。ナザレ出身のイエスという人を十字架につけた、ということ、事実そのものがわからなかったわけではありません。しかし、彼らは、何の罪もない神のひとり子であるイエスを、十字架につけてしまった、ということについては全くわかっていませんでした。罪にまみれた人間が、罪のない方を十字架につけてしまったのです。

イエスのこのことばは、神に対する私たちのためのとりなしです。とりなすことができるのは、相手に対して

影響力がある人でなければなりません。何か問題が起こり、相手に対して負い目を負い、自分自身では解決できないときに、私たちに必要な存在は、相手に対して影響力があり、その問題を解決する能力がある人です。人と人との間の問題であれば、誰かが間に入って解決することもあるでしょう。しかし、神と人との間にある問題については、誰もその間に入ることはできません。神に対して影響力があり、その問題を完全に解決する能力がある人などいないからです。

旧約聖書には、このとりなしの型、預言的な象徴として、アブラハムとソドム、ゴモラの町の記事を学ぶことができます。創世記 18:17、20-21、23-28、32-33 をお読みします。

18:17 主はこう考えられた。「わたしがしようとしていることを、アブラハムに隠しておくべきだろうか。

18:20 そこで【主】は仰せられた。「ソドムとゴモラの叫びは非常に大きく、また彼らの罪はきわめて重い。

18:21 わたしは下って行って、わたしに届いた叫びどおりに、彼らが行っているかどうかを見よう。わたしは知りたいのだ。」

18:23 アブラハムは近づいて申し上げた。「あなたはほんとうに、正しい者を、悪い者といっしょに滅ぼし尽くされるのですか。

18:24 もしや、その町の中に五十人の正しい者がいるかもしれません。ほんとうに滅ぼしてしまわれるのですか。その中にいる五十人の正しい者のために、その町をお赦しにはならないのですか。

18:25 正しい者を悪い者といっしょに殺し、そのため、正しい者と悪い者が同じようになるというようなことを、あなたがなさるはずがありません。とてもありえないことです。全世界をさばくお方は、公義を行うべきではありませんか。」

18:26 【主】は答えられた。「もしソドムで、わたしが五十人の正しい者を町の中に見つけたら、その人たちのために、その町全部を赦そう。」

18:27 アブラハムは答えて言った。「私はちりや灰にすぎませんが、あえて主に申し上げるのをお許してください。

18:28 もしや五十人の正しい者に五人不足しているかもしれません。その五人のために、あなたは町の全部を滅ぼされるでしょうか。」主は仰せられた。「滅ぼすまい。もしそこにわたしが四十五人を見つけたら。」

(中略) この後、アブラハムは少しずつ人数を少なくして、同じようにソドムのためにとりなします。

18:32 彼はまた言った。「主よ。どうかお怒りにならないで、今一度だけ私に言わせてください。もしやそこに十人見つかるかもしれません。」すると主は仰せられた。「滅ぼすまい。その十人のために。」

18:33 【主】はアブラハムと語り終えられると、去って行かれた。アブラハムは自分の家へ帰って行った。

このソドムという町にはアブラハムの甥であるロトとその家族が生活していました。ソドムは罪にあふれ、もはや回復する余地もないほど汚れた町でした。神はその町を滅ぼそうとされましたが、アブラハムはロトとその家族が住むソドムのために神にとりなしました。彼は初め、ソドムに 50 人の正しい人がいるなら、その 50 人のためにその町を赦されないのか？と神にとりなします。神は、その 50 人のためにその町を赦すと答えられました。その後、順に 45 人、40 人、30 人、20 人、10 人と人数を少しずつ減らしながら、神に何度もソドムの町についてとりなしました。しかし、残念ながら創世記 19 章で、神はソドムを完全に滅ぼされました。創世記 19:24-25、27-28 をお読みします。

19:24 そのとき、【主】はソドムとゴモラの上に、硫黄の火を天の【主】のところから降らせ、
19:25 これらの町々と低地全体と、その町々の住民と、その地の植物をみな滅ぼされた。
19:27 翌朝早く、アブラハムは、かつて【主】の前に立ったあの場所に行った。
19:28 彼がソドムとゴモラのほう、それに低地の全地方を見おろすと、見よ、まるでかまどの煙のようにその地の煙が立ち上っていた。

最初にお読みした 18:17 で、神は「わたしがしようとしていることを、アブラハムに隠しておくべきだろうか。」と考えられたと教えられています。神がご自身の考えをアブラハムに共有されたいと思われました。皆さんは、皆さんが考えていらっしゃることを誰かに共有されることがあるなら、その人は皆さんにとって重要な存在、そして信頼できる存在であり、大切な（貴重な）存在である人です。考えていることが重要であればある程、そのことを共有することができる人は非常に重要な存在であるはずで、アブラハムは一人の人に過ぎませんが、神にとっては大変重要な存在でした。その重要な存在であるアブラハムは、神がソドムとゴモラを滅ぼそうとされていることを聞いたときに、その町に正しい人がいても、その町を滅ぼされるのですかと繰り返しとりなします。神は、アブラハムのとりなしに対して、一つ一つ丁寧に答えられました。しかし、残念ながらソドムとゴモラは滅ぼされます。神は確かに、10人の正しい人がいるなら滅ぼさない、と約束されました。約束されたにも関わらず、神がソドムを滅ぼされたということは、この町には10人の正しい人さえもいなかったということです。そして、アブラハムも自分自身の義、自分自身の正しさやきよさによって、ソドムのためにとりなすことができなかったということでもあります。

この記事から、学ぶことができるポイントは2つです。

- 1)ソドムには罪があふれ、もはや神の前に立つことができる10人の正しい人さえもいなかったように、私たちの世界にも誰一人神の前に立つことができる、自分の正しさやきよさを主張することができる人はいない。
- 2) 神と罪人との間に立ちとりなすことができる人もいない。

パウロはこの絶望的な状況をローマ人への手紙 3:10 で端的に教えています。

3:10 義人はいない。ひとりもいない。

自分の義によっても、他の人のとりなしによっても神の前に立つことができない、赦されることもない。義人はいない。ひとりもいない。

この絶望的な状況にあって、唯一、神の前に立ち私たちのためにとりなしをしてくださったのがイエス・キリストです。イエスは、十字架につけられたときに、私たちのためにこのようにとりなして下さいました。

ルカ 23:34 そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」

もしあなたが、本当に、本気で赦されたい、神との正しい関係を持ちたい、罪から解放され自由な人生を持ちたいと思われるなら、神とご自分との間に、このイエス・キリストに入ってくださいよう祈り、求めてください。神は、私たちが永遠のいのち、神の救いを受けるために難しいことは何一つ求められませんでした。ただ、このイエス・キリストを自分自身の救い主として受け入れる。神とご自分との間に入ってくださいことを求め

る。それだけです。ぜひ、今日が皆さんにとってその決断の日であればと心から願います。

5. 「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」ルカ 23:43

ルカの福音書 23:43 で、イエスは十字架につけられた罪人の 1 人に対して、まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます、と言われました。十字架につけられた 2 人の罪人の内、1 人はイエスに向かって「あなたはキリストではないか。自分と私たちを救え」と悪口を言った、と教えられています。この人が本気でイエスをキリスト、救い主として信じていたなら、このような悪口は言わないでしょう。しかし、私たちはこの罪人と同じように、たとえ信じていなくても救いを求めるようなことを言うことがあるかもしれません。特に日本人は、救われればいいなあ、助かれればいいなあ、いいことがあればいいなあ、という信仰というよりは願望や期待をもって、いろいろなものに頭を下げることがあります。

残念ながら、本気でイエスをキリストと信じていたとは思えない罪人に対して、イエスは何一つ語られることはありませんでした。しかし、もう 1 人の罪人は違いました。彼は、1 人目の罪人とイエスに対してこのように話しかけます。ルカの福音書 23:40-42 をお読みします。

23:40 ところが、もうひとりのほうが答えて、彼をたしなめて言った。「おまえは神をも恐れないのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。

23:41 われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。」

23:42 そして言った。「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときには、私を思い出してください。」

彼は、自分と向き合い、自分自身が罪人であること、罪を犯しその結果十字架につけられていることを受け入れていました。そして、イエスに対しては、この方が神のひとり子であり、救い主であることを本気で信じていました。救われるのか救われないのかは言ってみなければわからないような願望ではなく、今、自分の横の十字架につけられている方こそ、罪のない方であり私にとっての救い主であることを、彼は信じていました。だからこそ、彼はイエスが御国の位に着く、すなわち十字架につけられて終わりではなく、この方はやがて神として座すべきところに座し、すべての人を裁く方とされることを告白した上で、人生の最期で悔い改めた私をどうか思い出してほしい、ということをお心から、真剣に願いました。この罪人に対して、イエスは「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」と告げられます。人生の最期で、多くの罪を犯した自分自身の人生をお心から悔い改め、イエスを自分自身の罪からの救い主として信じた罪人に対して、イエスは同じ十字架の上から、あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいる、あなたは救われた、ということをはっきりと告げられました。

皆さんは、今日、この十字架にかかれたイエスを、今お話しした罪人のように、神が人となって私たちの前に現れて下さった神として受け入れ、神からのことを直接いただくことができる人生を選択されますか？それとも、1 人目の罪人のようにイエスは私たちを救うかもしれないし、救わないかもしれない、助けられるかもしれないし助けられないかもしれないというような理解で終わらせてしまいませんか？

最後に詩編 18 編から数節を抜粋して終わりたいと思います。この詩編 18 編はイスラエルの王ダビデの告白であり、彼自身が苦難から救い出されたときに歌った箇所です。

18:1 彼はこう言った。【主】、わが力。私は、あなたを慕います。

18:2 【主】はわが巖、わがとりで、わが救い主、身を避けるわが岩、わが神。わが盾、わが救いの角、わがやぐら。

18:6 私は苦しみの中に【主】を呼び求め、助けを求めてわが神に叫んだ。主はその宮で私の声を聞かれ、御前に助けを求めた私の叫びは、御耳に届いた。

18:9 主は、天を押し曲げて降りて来られた。暗やみをその足の下にして。

18:10 主は、ケルブに乗って飛び、風の翼に乗って飛びかけられた。

18:16 主は、いと高き所から御手を伸べて私を捕らえ、私を大水から引き上げられた。

18:17 主は私の強い敵と、私を憎む者とから私を救い出された。彼らは私より強かったから。

18:18 彼らは私のわざわいの日に私に立ち向かった。だが、【主】は私のささえであった。

18:19 主は私を広い所に連れ出し、私を助け出された。主が私を喜びとされたから。

18:30 神、その道は完全。【主】のみことばは純粹。主はすべて彼に身を避ける者の盾。

18:31 まことに、【主】のほかにだれが神であろうか。私たちの神を除いて、だれが岩であろうか。

18:32 この神こそ、私に力を帯びさせて私の道を完全にされる。

このダビデの告白が、今日、あなたの告白ともなるようにお祈りして、今日のお話を終えたいと思います。